

開会挨拶

愛知大学学長 佐藤 元彦

おはようございます。愛知大学の佐藤でございます。明日にかけて2日間にわたり、国際シンポジウム「近代台湾の経済社会変遷」を開催いたしましたところ、多くの方々にお集まりいただきまして、心から感謝を申し上げます。あわせて今回のシンポジウムの共催をいただきました台湾中央研究院台湾史研究所々長の謝先生をはじめとして、関係者の皆様にも心から感謝いたします。また本日は台北駐日経済文化代表処の李世昌様にもご臨席を賜っております。李様にも心から感謝申し上げます。さて、東亜同文書院といいますが、どちらかといえばその所在地でございます大陸中国・上海との関係ということがこれまで重視をされてまいりましたけれども、東亜同文書院に学んだ学生の行動という観点から見ますと、実は大陸中国だけではなくて、今回のテーマにも関係します台湾、さらには東南アジアのベトナム、フィリピン、インドネシア、そういった地域にも広く及んでいます。特に書院生が各地を訪れて記録を残した大旅行誌、あるいはそれに基づいた卒業研究等々につきましても、日本の若者が見たという限定がございますけれども、その時期時代の貴重な歴史資料ではなからうかと思えます。そのような観点から見ましたときに本日台湾とのかかわり、これをテーマとして国際シンポジウムが盛大に開催されますことは、まことに学術的な意義があるというふうに愛知大学としても考えているところでございます。2日間にわたってそれぞれに専門的な立場からご発言、ご発表いただきまして最終的に成果が得られるというふうに期待をしているところでございます。私自身も拝聴したいという報告がプログラムの中にはかなりございますけれども、実は昨日、本日で、この校舎を使い

ましてオープンキャンパスが実施をされております、本日も大変申し訳ないのですが、これからそちらの対応をさせていただくということでご容赦いただければと思います。昨日は3,000名を超える方々にご訪問いただきました。本日もおそらく同数か、それ以上の訪問をいただけるのではないかと思います。あるいは皆様にはそういう点でご不便をおかけするかもしれませんが、ぜひご理解を賜われればお願いいたします。最後になりますけれども、2日間にわたるシンポジウムが実り多い成果を収めることを祈念申し上げ、あわせてご後援をいただきました中日新聞社、朝日新聞社、読売新聞社、さらには財団法人霞山会、東海日中貿易センター、そして愛知大学同窓会の関係者の皆様方に感謝を申し上げます、開会のあいさつとさせていただきます。本日はありがとうございました。

